

# iPadを使った江戸期宮島町家通りの町歩き

## Walking Miyajima Machiya Street on the Old Drawing in the Edo Period Using iPad

三好 孝治†  
Takaharu Miyoshi

### 1. はじめに

近年、資料を片手に地域の歴史や文化を学ぶ歴史散策が頻繁に開催されている。その様な中、本稿では iPad の画面に古地図や絵図を表示させ、現在と比較しながら歩く歴史散策の一手法を提案する。今回事例とする宮島の町屋通りは、土産物屋で賑わう浜通りから一筋山側に入った静かな通りであるが、かつては町の中心であった。iPad 画面の表示を現代地図、宮島に伝わる吉田家絵図、厳島図絵、各説明文などに切り替え、町屋通りのかつての江戸期の賑わいを想像しながら町歩きをおこなう。今回提案する iPad による町歩きの特徴は、①江戸時代に描かれた多くの古地図や絵を画面で切り替えながら歩く、②GPS 機能によりその絵図の中を歩いて現代と比較する、③屋号解析で家業を明らかにし、当時の町をイメージする、④異なった時代の地図を比較して、町の変遷を知るといった点である。

### 2. iPad に格納する情報

#### 2.1 宮島の地図情報

基本となる地図情報は現代地図(図1)と吉田家絵図(1783年)である。この二つの地図を iPad の画面に表示し、江戸中期と現代の町の様子を比較しながら町を歩く。二つの地図の相違点は、現在表参道と呼ばれている沿岸部の地形の変化であり、海側に拡張して現代に至っている(文献1)。吉田家絵図は地割図の中に屋号・名前が記載されており、屋号情報と共にその地理上の位置を知ることができる(図2)。2007年に廿日市市教育委員会により詳細な地割復元図が作成されており(文献2)、その各地割の中に吉田家文書に記載されている屋号名を現代文字で書き入れ、デジタル画像を作成した。

その他の地図情報としては、「厳島図絵(1842)」、および「とみくじ界晩終地図-慶応記憶地図(1866)」が残っており、いずれも現代地図と対応する位置関係を設定することにより、GPS 機能を用いてそれらの古地図あるいは絵図中での現在位置を知ることができる。厳島図絵は全10巻のうち1~5巻の、町、浦、寺社など名所の風景を描写した絵を用いた。とみくじ界晩終地図は新町にあった遊郭、富座界隈のごく限られた範囲の地図である。

#### 2.2 宮島の屋号情報

屋号には、地名(屋敷主の出身地を表す)、商品名、職業名、嘉名などがあり、商品名や職業名の場合は、それが家業と結びつく場合が多いと考えられる。町屋の屋号から家業が推定できれば、江戸期の町屋通りの特徴をつかむことができる。これまでの研究で明らかとなった家業は、紙屋、たうふや、阿賀屋(魚問屋)、和泉屋(女郎屋)、槌屋(女郎屋)などである。また、湊に近い町屋通りの北之町、

中之町、牛玉之前町にある茶屋、因幡屋、佐伯屋、出雲屋、ふちや、大阪屋、柳井屋、伊予屋、奈良屋などは大願寺所蔵文書「覚」から米屋であると推定された(文献3)。和泉屋と槌屋の女郎屋は、厳島図絵の新町の描写から、紙屋、たうふや、阿賀屋(魚問屋)は、対岸の廿日市宿にも同一の屋号が存在することから家業を推定した(文献4)。遊郭の存在、湊周辺に集中して並ぶ米問屋、魚棚町にある魚問屋など、屋号情報により町屋通りのおおよその町の様子明らかとなった。

#### 2.3 江戸時代に描かれた絵の情報

町屋通りの賑わいをイメージする一助として、江戸時代に描かれた様々な絵を iPad の画面に表示できるようにした(表1)。例えば、宮島の景色を描いた絵、大門、志あん橋、住民の生活を感じさせる商いの様子を描いた絵、宮島の主産業であったしゃもじ作りの絵などである。中でも、厳島図絵は江戸末期の眼前に広がる景色を描いていると考えられ、地形の変化を知る上で有用である(文献5)。



図1 宮島町屋通りの現代地図



図2 吉田家絵図

† 広島工業大学工学部, Department of Civil Engineering and Urban Design Hiroshima Institute of Technology

## 2.4 iPadによる町歩き

1に示した①～④のiPadによる町歩きの特徴を表す、4つの地点のiPadに表示される説明画面、および入力された絵・古地図・絵図と切り替えながら歩く方法を示す。

### (1) 広島工業大学地域環境学習センター (宮島こもん)

宮島こもんは吉田家絵図 (図2) 中のAの森田屋の位置にある。吉田家絵図およびそれに対応した現代地図 (どちらでもよい) のランドマークをクリックすると説明文がiPadに表示される (図3)。巖島道芝記に描かれている石段は現在も江戸時代と変わらぬ位置に存在している。石段からすぐ左の家は紙屋惣右衛門、その左が森田屋と考えられ、眼前の景色と絵を見比べ、江戸時代の状況を想像する。紙屋惣右衛門が実際に紙を商っていたかは不明であるが、説明画面の広島城下絵屏風の紙屋の店先の絵から当時をイメージする。図4は、iPad画面を巖島図絵今伊勢町に切り

表1 本システムに用いた絵画一覧

絵画名	年代	引用した内容
広島城下絵屏風	1804～1807	江戸期広島城下の商家の店先 (紙、魚屋)
巖島図絵	1842	今伊勢町、新町、有之浦の町の様子 遊女能を観るの図 金鳥居の辻
巖島道芝記	1702	今伊勢神社の石段、周辺の屋敷
新吉原大門口中之町浮絵 奥村政信	1686～1764	吉原遊郭の大門
地御前神社材木入札場絵馬	1760	宮島対岸廿日市の富突き場の様子
摂津名所図絵	1796～1798	富突きの様子
一目千軒	1757	京都島原志あん橋
芸備孝義伝	1801	しゃもじ作りの様子

### 森田屋左衛門

この宮島こもんの位置には、江戸時代中期(1783年)には、森田屋左衛門という人物が住んでいたようである。現在駐車場となっている角には、紙屋惣右衛門の屋敷が建っていた。

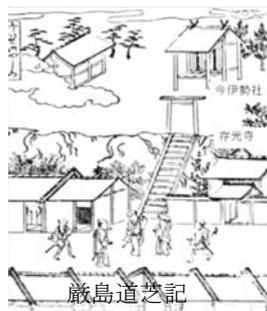
紙屋が紙をおつかう商人であったかどうかは不明であるが、対岸の廿日市の宝暦12年(1762)の貴高根帳にも、かみや七左衛門などの名前が見える。

元禄15年(1702)刊行の巖島道芝記には、今伊勢神社への石段の横に、2軒の屋敷が描かれている。

角から2軒目が、現在の宮島こもんの位置に建っていた屋敷と考えられる。のれんがかかった商家らしい家が描かれている。



広島城下絵屏風



巖島道芝記

図3 森田屋左衛門の説明

替えたものである。巖島図絵にも現存する今伊勢社の石段が描かれている。石段の角から2軒目が森田屋 (現在の宮島こもん) と考えられ、のれんがかかった商家らしい家が描かれており、眼前の景色と絵を見比べてその変化を確認する。

### (2) 和泉屋・榎屋

女郎屋である和泉屋、榎屋は吉田家絵図 (図2) 中のBの位置にある。ランドマークをクリックすると説明文がiPadに表示される (図5)。

図6は、iPadの画面を巖島図絵新町に切り替えたものである。新町を描いた巖島図絵には、いずみやと書かれたあんどんの前に遊女が描かれている。数歩先には、かむろらしき少女と太鼓持ちも描かれている。隣の榎屋の前は多くの男性客で賑わっている。二階の格子越しに外を見ている



図4 巖島図絵 今伊勢町

### 和泉屋・榎屋

ここは女郎屋の和泉屋、榎屋の前である。この道が途切れた辺りに、富くじ (現在でいう宝くじ) を売ったり、抽選が行われた大東入札場、などがある。

巖島図絵には、着飾った花魁の姿も描かれている。



図5 和泉屋・榎屋の説明



図6 巖島図絵 新町

遊女の姿も見える。絵の左端には遊郭の裏木戸が描かれている。この絵は細かい描写で当時の遊郭を彷彿とさせる。現在は閑静な住宅街であり、往時の賑わいは感じられない。

図7は、iPadの画面をとみくじ界晩終地図(文献6)に切り替えたものである。現在位置は地図中の左上に青○で表示されている。慶応記憶地図に、△で示された女郎屋として、いづみや、いづみや別荘、つちや、平次屋の4軒が記されている。他に、料理屋、富札口屋、遊人屋、富の宿屋、芸者屋などが立ち並び、この地域が遊興の場であったことを示している。しかし現在はその跡形もなく、変化に驚かされる。遊郭の範囲を示す入り口と裏口が記されており、厳島図絵の裏木戸の位置と符号する。

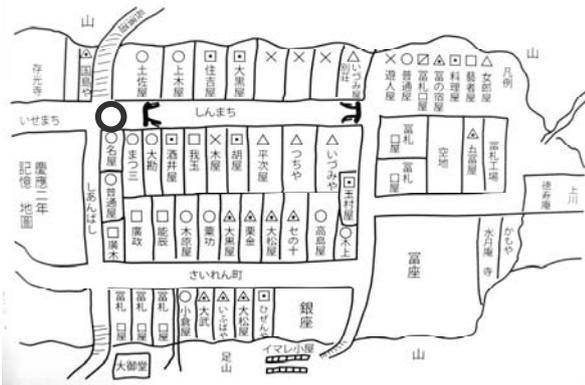


図7 とみくじ界晩終地図－慶応記憶地図(1866)

**大坂屋**

中之町には大坂屋、柳井屋など4軒の米問屋があり、柳井屋は年間の売上高が4000石もあった。大願寺所蔵文書「寛」(年不詳)によると、宮島の米屋16軒が、年間に約3万石の米を扱っていた。

島民、旅客用の飯米、4000石を差し引いても、少なくとも年間2万石以上が広島城下へ水揚げされたと考えられている。

宮島の港は水深があり、大きな船が接岸できた。広島港は遠浅で、好きな着岸所が無かった為、日本各地からの米は船で一旦宮島に陸揚げされ、小舟に積み替えて広島に運ばれたそうである。宮島は、広島城下の外港の役目を果たしていた。

★中山富広著 近世厳島研究序説—その経済的基盤と観光産業—「厳島研究」第4巻2008年参考

**江戸期宮島の米屋 16軒**

※水色の枠は推定  
※せうや不明  
有ノ浦  
上御座木  
アユミコヤ  
宝善院  
西方寺

★江戸期宮島の16軒の米屋

図8 大坂屋の説明

(3) 大坂屋(米屋)

大坂屋は吉田家絵図(図2)中のCの位置にある。図8は、iPadに表示される説明文である。屋号調査により、有之浦の湊に近い北之町、本町(現在は中之町)に多くの米屋が立ち並んでいたことがわかった。北之町、本町が町の中心で賑やかな場所であったことが想像できる。

図9は、iPadの画面を厳島図絵有之浦に切り替えたものである。町屋通りから海側へぬける大小路という道を通って湊の方へ移動すると、それに伴い図絵中の現在位置を示す青○が道に沿って動くことが確認できる。図絵に描かれている湊は、現在は埋め立てられ、浜通りという土産物屋や飲食店が立ち並び繁華街となっており、江戸時代から現在までに変化した地形を確認できる。港には陸揚げされた米を忙しそうに運ぶ人たちの姿が描かれており、町の経済に米が大きくかかわっていたことがわかる。また、町屋通りに面した店の前に、道にはみ出す形で置かれているのは、米俵と思われる。

(4) 幸神社の石段

幸神社の石段は吉田家絵図(図2)中のDの位置にある。図10はその説明文である。厳島図絵には、金鳥居の辻として幸神社界隈の景色が描かれている。絵の中央にある鉄鳥居は長寛年中(1163~1165)建立とも、足利尊氏(1305~1358)が建てたが竣工しなかったとも言われている。未完成の鉄鳥居こそ無いものの、現在の景色と厳島図絵を見比べると大きな変化はない。図絵には多くの人物が描かれており、江戸時代の町屋通りの賑わいが感じられる。



図9 厳島図絵 有之浦

**幸神社の上り口の石段**

この石段は段差が短く、着物を着いても上がりやすくなっている。

★厳島図絵  
侍、町人、虚無僧(こむそう)、遊女など、多くの人で賑わっている。また、未完成の鉄鳥居が描かれている。

図10 幸神社の石段の説明

町屋通りのランドマークは、上記の 4 地点を含み、全部で 15 地点に取った。屋号から家業が推定できた町屋や現在も残っている小路、地形が大きく変化した場所、古い絵などに景色が描かれている所など、町歩きをする際に参加者が興味を持つであろうと思われる地点を選んでいる。

### 3. iPad による町歩きの評価

2013 年 5 月 31 日、宮島町屋通りの町歩きを実施したので、その内容と、アンケート調査結果について述べる。

#### (1) 町歩きの概要

今回は、地域の歴史・文化に関心の強い廿日市市郷土文化研究会の会員に参加者を限定した。人数は 11 名で、内 3 名が女性、年齢は 39 歳から 76 歳、7 名が 60 歳以上で、宮島の町屋通り約 500m を 1 時間と少しかけて歩いた。準備した iPad は 1 台だけであったが、移動距離が短いので、時間をかけて全員に交互に使用してもらい感想を聞くことができた。

#### (2) アンケート調査結果

iPad を使用したシステムに関する選択形式の設問を 5 題、その他の記述式の設問を 8 題用意した。表 2 に選択形式のアンケート結果を示す。質問 4 の回答で、3 名が B と答えており、戸外では iPad の画面が角度によっては見辛い場面があったと推測されたが、1 人 1 台使えれば解決する問題であると考え。その他は概ね良い結果であったが、特に GPS が正しい位置を示したことで、江戸時代の町が理解できたことに対する評価が高かった。

次に記述式の設問の内容とそのアンケート結果について述べる。設問は以下の 8 題である。

1. 町歩きで江戸時代の宮島町屋通りの歴史・文化に興味を持ってましたか
2. iPad による町歩きの面白いところ印象に残ったところ
3. iPad による町歩きにあったらよいと思う機能
4. 江戸時代の町屋通りと現在を比較し、町の変化で印象に残った点は何か
5. 宮島町屋通りの景観についてどう思いますか
6. 町屋通りの活性化で、何か良いアイデアはありますか
7. 町屋通りの魅力は何だと思いますか
8. 今回勉強になったことがありますか その他自由に意見や感想をどうぞ

これらの回答をまとめると、iPad による町歩きの魅力は、

表 2 システムに関するアンケート結果

	質問内容	評価
1	iPad や iPhone を使った町歩きはどうでしたか	A=10 名 B= 1 名
2	江戸時代の町の理解に役立ちましたか	A=11 名
3	GPS は、正しい位置を示していましたか	A=10 名 無 1 名
4	地図や絵図はよく見えましたか	A= 8 名 B= 3 名
5	説明文や画像は役立ちましたか	A=10 名 B= 1 名
大変良い=A、良い=B、普通=C、良くない=D、 大変良くない=E		

現代と江戸時代の比較ができる点にあり、江戸時代に描かれた絵との比較に興味を示す人が 6 名。町割りや道、幸神社界限など変わらずに残っている所もあるが、湊周辺の地形の変化や、現在では想像がつかないが遊郭や米屋が多く存在したことに驚く人が全員の 11 名。また、屋号から当時の町の様子が明らかになると、江戸時代の生活感を感じながら歩くことができるという意見があった。本システムを町並みや建築物の保存に活かしたり、観光客に貸し出すことを期待する意見もあった。この町歩きを通じて、参加者は江戸時代を感じさせる町屋通りに魅力を感じ、現在の景観を残して欲しいという意見が 9 名あった。

### 4. おわりに

宮島の町屋通りは、かつては町の中心であったが、現在は町屋が建ち並ぶ静かな環境を保っている。iPad で町屋通りを散策することにより、江戸期の町の賑わいを知ることができた。また現在と古地図を比較して、地形が大きく変化した所、あるいは江戸を感じる風情をそのまま残している所があることを確認できた。今回の iPad による町歩きの優異点として、絵図、古地図、絵などの紙地図遺産のデジタル化とその活用があげられる。人の目に触れることの少ない貴重な紙地図や絵に光を当て、その存在や価値を問うための一方法として提案したい。古地図が地図としての本来の役割を果たすことは、観光への活用や、実際に歩くことを通じ、記された情報が歴史研究の上で新たな発見につながる可能性がある。また、同じ地点でのいくつかの年代の地図情報は土地利用の変化を容易に知る上で役立つ。

iPad による宮島の町歩きの対象地域は島の西側の限られた範囲である。また、厳島図絵のうち今回活用することができたものは今伊勢町、新町、有之浦、金鳥居の辻と、ごく一部である。屋号研究により解明された家業もまだ少なく、江戸時代の宮島の町を明らかにするところまでは至っていない。吉田家絵図により江戸中期の宮島の全屋号情報を知ることができるので、今後研究がすすめば、西、東の町をさらに詳しく把握できる町歩きが期待できる。同時に、現在宮島町屋通りを、国の重要伝統的建造物群保存地区に申請しようとする動きがあり、厳島神社の門前町であるこの地区を対象とした町歩きは、景観の魅力や歴史的な価値を認識する上で重要なことであると考え。

### 参考文献

- (1) 「文化芸術振興による経済への影響に関する調査研究」最終報告、平成 16、17 年度文化庁委嘱研究、政策研究大学院大学、平成 18 年。
- (2) 厳島神社門前町 廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書 P. 17 2007 年、廿日市市教育委員会。
- (3) 中山富広 近世厳島研究序説－その経済基盤と観光産業－厳島研究第 4 号、9-23、2008。
- (4) 三好孝治 江戸期廿日市本陣周辺の町並み復元－廿日市の文化第 24 集 90-100 廿日市市郷土文化研究会、2011。
- (5) 平川隆啓 歴史的環境をふまえた外部空間の空間利用に関する研究 その 1：芸州厳島図会にみる宮島の空間特性(都市計画)－日本建築学会中国支部研究報告集 30、793-796、2007。
- (6) 厳島神社門前町 廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書 P. 59 廿日市市教育委員会、2007。